

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域課題解決型キャリア教育

過疎、少子高齢化がいち早く進んだ三重県伊勢志摩地域。2016年には伊勢志摩サミットをホストし、世界の諸問題について議論が行われたその地に、三重県内外から92人の高校生が集いました。2日間をかけて地域と自分たちの未来について考えた「高校生地域創造サミット」を誌上レポートします。

誌上レポート

36校92人の高校生が描く 地域と自分の未来 ～高校生地域創造サミット～

第15回 特別編



取材・文／江森真矢子

2017年の年の瀬、紀伊半島東部に位置する南伊勢町に三重県内31校、県外5校、92人の高校生が集まった。2日間にわたって行われた第1回「高校生地域創造サミット」は、南

伊勢町の地域課題解決策を町に提言することをゴールとしたプログラム。

初日は高校生の取り組み地域活性化の先進事例や、南伊勢町で活躍する大人の話、代表生徒のパネルディスカッションでインプット。2日目は初日に吸収したことを参考に班ごとにアイデアを作り、最後にすべてのアイデアを統合した提言にまとめる。

サミットを企画、主催したのは三重県教育委員会事務局教育政策課。辻成尚課長は開会式で「今は役場の人だけでなく、まち全体で社会を考える時代。君たち高校生もその当事者です」と語りかけた。

参加した高校生の動機は「新しいことに挑戦したい」「将来のために役立ちそうだから」「地域活性化に興味がある」とさまざまだが、「一番多かったのは『いろいろな高校の人と話したい』というもの。『自分には価値観や新しいものの見方を手に入れてみたい』など、交流によって新しい自分に出会いたいという気持ちがあるようだ。12の班に分かれた生徒は自己紹介をしあった後、昼食をとりながら徐々に打ち解けていった。

大切なのは 自分がどう生きたいか

昼食後は小山巧町長と、企画から関わったアドバイザーの三重大学副学長・西村訓弘教授から今回の課題についてのポイントが語られた。「南伊勢町は第一次産業のまちですが、人口はこの5年間でも13%減り、少子高齢化がすごいスピードで進んでいます。ですが、国立公園内にあり自然環境はとても豊か、漁獲高は三重県一位、といったところがたくさんあります」と小山町長。

西村教授はその良いところをどう活かすかが大事だと伝えた。「私は南伊勢出身です。ここは昭和の半ばから急激に人口が減り、一番最初に疲弊した場所。逆に、だからこそ最先端であり、豊か。一人が使える土地も漁場も広く、今はコンビニもネットもある。この豊かなものをどう使うか。『自分たちのアイデアで南伊勢を元気にする』なんて考えなくていい。今の時代にどう生きていきたいのかを話し合っ、日本で一番面白い生き方を提案してほしい。そう、高校生たちに与えられたテーマは「これからの時代に地域の資

図1 高校生地域創造サミット概要

三重県内外の高校生92人が南伊勢町に集い、フィールドワークやディスカッションを行い、南伊勢町の地域課題に対して、高校生ならではの発想による「地域を活かした課題解決策」を検討し、南伊勢町に提言する活動を行う

【探究テーマ】

「これからの時代に地域の資源や特色を活かして自分らしく生きるためには」

【開催目的】

高校生が地方創生や地域活性化の重要性について理解し、地域のことを主体的に考え行動する意欲や地域とともに課題解決に取り組む姿勢を育む

【日時】

・1日目：2017年12月26日(火)11:30～21:00
・2日目：2017年12月27日(水)8:00～16:00

【場所】

三重県度会郡南伊勢町

【主催・後援】

主催：三重県教育委員会 後援：南伊勢町

【参加者】

三重県内高校生76人、三重県外高校生16人 計92人

- ・三重県立高校(28校・64人)
桑名西高校、桑名北高校、桑名工業高校、四日市高校、四日市南高校、四日市工業高校、神戸高校、白子高校、津高校、津西高校、津東高校、白山高校、あけぼの学園高校、伊賀白鳳高校、名張高校、名張青峰高校、松阪商業高校、飯南高校、昂学園高校、宇治山田高校、宇治山田商業高校、南伊勢高校(度会校舎)、南伊勢高校(南勢校舎)、鳥羽高校、志摩高校、水産高校、尾鷲高校、紀南高校
- ・三重私立高校(3校・12人)
高田高校、セントヨゼフ女子学園高校、桜丘高校
- ・三重県外高校(5校・16人)
静岡県立榛原高校、大阪府立能勢高校、広島県立庄原格致高校、島根県立隠岐島前高校、高知県立窪川高校



図2 第1回「高校生地域創造サミット」プログラム

1日目	
11:00	集合 班別のテーブルで名刺を用意
11:30	開会 交流会 南伊勢町長、運営の県教委スタッフの紹介や12の班ごとに自己紹介で場を温める
12:00	歓迎昼食会 南伊勢町の食の幸に触れながら交流する
12:45	参加代表校からの報告 榛原高校(静岡)、南伊勢高校南勢校舎(三重)、能勢高校(大阪)、庄原格致高校(広島)、隠岐島前高校(島根)、窪川高校(高知)
14:00	南伊勢町からの課題の提案 フィールドワークの概要説明
14:30	フィールドワーク 10コースに分かれ「南伊勢町の資源や特色を活かして、自分らしく生きている人々」に会いに行く インタビューや仕事体験を経て、3枚の写真でその人のことを伝えるための準備をする
17:30	宿舎へ移動、夕食
19:00	ナイトセッション 鈴木英敬三重県知事の地域創生への取り組みや、自身の人生、自分らしく生きるためのメッセージを聞く フィールドワーク報告プレゼンはその人を一番よく表す3枚の写真を選んで表現 知事を交え、代表生徒6人がそれぞれ実践している地域との関わりや夢について語り合う
21:00	
2日目	
8:00	今日の流れの確認 アイスブレイク
8:20	グループ討議①アイデア出し、テーマ決定 テーマを参考に、南伊勢町の具体的な活性化策を考える。 決定したテーマを本部に報告
10:20	グループ間の交流(意見交換) メンバー1人程度を残して、他班の討議内容を聞きに行く
10:40	グループ討議②ポスターセッションに向けた資料作成 他班の討議内容も参考にしながら班の意見をまとめ、ポスターセッションの準備を行う
12:00	昼食
12:45	ポスターセッション 各班メンバー全員が1回ずつポスター発表を行い、他のメンバーは別班の発表を聞きに行く。 投票により「ベストアイデア賞」「ベストプレゼンテーション賞」「ベストユーモア賞」を選出
14:15	提言の取りまとめ 西村教授のファシリテートの下、各班の意見をもとに提言「南伊勢町を変えていくための8の行動」をまとめる
15:10	閉会行事 参加生徒代表が「南伊勢町を変えていくための8つの行動(海ぼうず宣言)」を小山巧南伊勢町長に渡し、各賞表彰や西村教授による講評で幕を閉じる
16:00	

源や特色を活かして自分らしく生きるためには「だ」。

地域創造サミットの仕掛け人である上村和弘先生は、同教育委員会教育政策課で学校統廃合を含む高校教育の全体像を検討してきた。昨年度策定した「県立高等学校活性化計画」では、地方創生、地域の担い手育成の視点を取り入れ、学校規模で一律に統廃合を決めず、小規模校は地域と一体となって活性化を図ることとした。「だからこそ、高校生自身も地域のことを自分事として捉えてもらいたい。サミットは高校、高校生、地域の関係づくりの種まきという狙

いもあるんです」と上村先生。

県外から参加した5校は、地域・学校協働の先進校。初日には地元校舎が6校の生徒による取り組みの発表が行われた。地元、南伊勢高校南勢校舎の代表は、社会課題をビジネスによって解決する「ソーシャルビジネス」によって南伊勢町の課題解決を目指すクラブ活動のメンバー。町のキャラクターをかたどったお菓子「たいみー焼き」や、特産品を詰め合わせたギフトボックスを企画、販売するといった取り組みを行っている。

広島県立庄原格致高校からは地元の祭に運営メンバーとして加わって

盛り上げたり、お菓子を振る舞う「スイーツマラソン」を企画・実行した活動が報告された。また、静岡県立榛原高校は、高大行政連携による「地域リーダー育成プロジェクト」で活躍したメンバーが登場。地域の未来を考える話し合いの場で、ファシリテーターとして活動してきた3人だ。同じ高校生で地域が動き、活性化に寄与している事例発表には、参加者も大いに刺激を受けた。

出合いがもの見方を変える

フィールドワーク先は矢野次男副

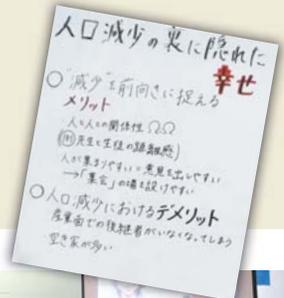
町長の推薦で選ばれた。東京の高級果物店に特産の蜜柑を卸している農家、シーカヤックで観光客を集める会社などまさに「地域の資源を活かして自分らしく生きている」人たちだ。

その一人、上村真珠養殖の上村栄司社長は3代続いた真珠の養殖業を営むが、それまでの常識にとらわれないアクセサリを作り、今ではニューヨークで展示会をするまでに成長している。ビジネスで成功している人は少ない、といったイメージをもっていた高校生たちにとって、フィールドワークで出会った大人たちの生き方や考え方は目から鱗。

表中1日目のイラストは、牧之原市まちづくり協働ファシリテーターの絹村亜佐子さんによるもの。絹村さんは議論やワークの過程を可視化する「グラフィックレコーディング」を榛原高校の生徒に指導している。開会式から閉会式まで、一部は榛原高校の生徒とともにサミットを記録した。

図3 南伊勢町を変えていくための8つの行動(海ぼうず宣言)

- 毎年高校生が集うイベントを行い、高校生がメディアを使ってありのままの南伊勢を発信する
- 南伊勢町で生きることを実感する体験型無料ホームステイを実施して南伊勢町ファンを増やす
- 町にある財産をもっとアピールする
- 機械化よりも機会を大切に!
- 人々が交流しあい自らが町を創っていく機会を大切にする
- 町の人々が教師となって個性ある教育を実践する
- プロ・職人・芸術家など輝いている人を南伊勢町に呼び込む
- 具体的な(南伊勢で生きる)ライフプランを提案して移住者を支援する



三重県教育委員会
教育政策課
上村和弘先生



三重大学
副学長
西村訓弘教授



南伊勢町
副町長
矢野次男氏



フィールドワークで出会った「本気の大人」の一人、上村栄司社長



初日の夜には、その人の魅力を一番表す3枚の写真を使って報告



会場には、三重県産のお菓子やお茶の用意が。休憩時間も各班に任せられ、オンオフを切りかえながら闊達な議論が行われた



パネルディスカッションは西村教授のコーディネートで本質的な気づきや本気の思いが引き出され、フロアからも熱を帯びた発言が続いた

な活性化策を考える。進行役の上村

まずは自分の地域を
肯定していく

2日目は班で南伊勢町の具体的な

たつぱりの刺激はここで終わらず、

ナイトセッションには全国最年少知事

である鈴木英敬(えいけい)三重県知事が登場。

自身の生き方を紹介しながら、「この

サミットを自分らしい選択ができるよ

うになるためのチャンスに！」とエール

が送られた。続くフィールドワークの

報告も含め、たくさんの魅力的な生

き方があることを知った1日となった。

初日の最後は代表生徒6人による

パネルディスカッション。西村教授が

「暗い未来が語られるけど信じなくて

いい。今は自分の力をつけていたら

なんでもできる時代。でも、力をつけ

るってどういことなのかフィールド

ワークを通して知ってもらいたかった

んです。まずは、ここに来る前とどう

変化したか聞きたいな」と口火を切

ると、「すごい田舎に連れてこられた

と思つたら、すごい光っている所だっ

た」「町を大切にしている大人の熱意

に触れて、自分の町を大切にしよう

と思つた」とパネリストが思いを口々

に語り、夜9時までの2時間はあつと

いう間に過ぎていった。

先生から「どんな南伊勢なら自分ら

しく生きていけるかを考えて」と伝え

られ、議論はスタート。

高校生たちが考えたのは、宿泊料

がわりにその家の手伝いをする「民

泊体験」や、「住める国立公園」を打

ち出した移住促進策、「機械化より

機会化」と銘打ち出会いの機会を提

供するツアー案など、良さに着目した

ものばかり。また、個性を活かす教育

環境を整えるためにこのサミットの

ように意見を否定されない高校を作

ろう、というものもあった。

これらの案をもとにまとめた「南

伊勢町を変えていくための8つの行

動(海ぼうず宣言)(図3)を代表生

徒が読み上げ、小山町長に手渡し

して「高校生地域創造サミット」は幕を閉

じた。次年度も同時期に他地域で開

催し、新たな種まきをと考えている

三重県教委。行政・地域・高校の協働

により地域の持続的発展を目指す

動きには注目が集まりそうだ。

では、高校生たちはこの2日間で

何を学んだのか。最後に一人の高校生の

感想を紹介する。「他の高校の生徒

がすごく地域について考えていて、自

分ももっと自分の地域を知ろうと思

つた。まずは自分の地域のことを「肯

定」していくと思う」